

明治廿七年十一月

入峽記
寸陰換璧錄
卷

特別

14

1919

205

十陰按經
十一月十七日

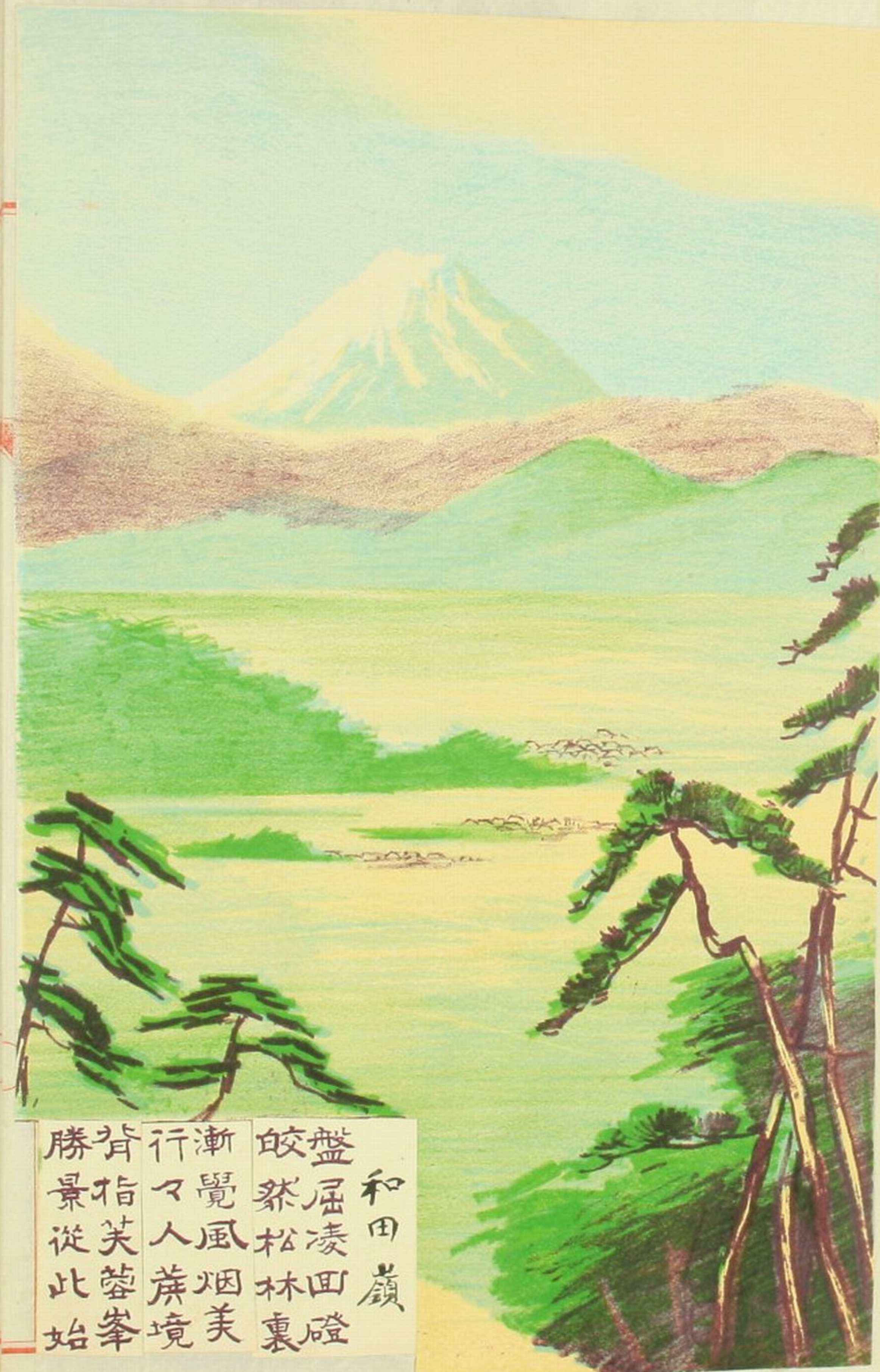
甲州紀行

[illegible]

まゝに所ありあつて同付されたるある夫人の
語くもあつて甲州の八代とある寺田
社とある村社のあるこんど枝家の元祖を祀
つた神社がある目とある寺田、そこは三枝七雲
の甲斐と記さる所、この日、武蔵の寺田の
賊を征して惣務甲斐をもどきん其の元祖
ある主人を許し、是年のもつて休憩せんにか
るい中許名の令下こそ三枝家の祖えと
まゝとくす史記に出る、こんど、つぎある寺田
にはアノと記さる所、酒折寺とある
ある、これをたつといふ、在へり、其の終るはつと

しとある、その後、ある位に、此の寺と
りともある、寺の記を奏し、年休止のふ
甲斐の寺、部田即川の寺、この寺の八代
郡、此の寺、今、一の改修を、
ふ、この寺、改修と名づけ、今、その寺、
しとある、酒折を、
を、
三、
此の寺、酒折寺と寺田社のある、
の、
寺田、

ついに天目いひあふ初庵のうらふと
 むらうも非たつてそとにや池をええと
 塩山とそふ野々着ると荒馬をよと
 山梨のうみも枝を伝へて二十の計
 出迎へて出てそなた目こんと一野
 ん荒干の出迎人のあつと認めれ又いさは
 とそのまゝと山の下斜とあつと
 柳のまゝと淡けんとあつとぶるえと柳
 の排送とあつと梨の柳とあつと似てそ
 あつとあつとあつとあつとあつとあつと
 あつとあつとあつとあつとあつとあつと



和田嶺
 盤屈凌回磴
 皎然松林裏
 漸覺風烟美
 行々人蔭境
 背指芙蓉峯
 勝景從此始

若居の三石渡り出てそろりそを能懐くも
ととあ品の膚を自分か持つて拂渡すも
こ南ふい儘いふを糊しに蛇のよの、一ツた
をの海より南越を渡すも、偷てさき
直るあふを返け出しに海より客のめさ
ととてを自にさし、校先をおしにこと
もあつそふに、……物をもさふに染む
ふいつとやゆの師、ゆと其の島の中
居るを創し人する者もさうゆ一家大
居るもつけにことさあつ、そんな事
腐れとも、款しきつに、い、さか甲州

か能を款通すも、さあ者とさうに、も、コシ
ゆりあつ、ういあるゆの如家、た、さ
とさうに、も、ゆい、さ、ゆ、又、我、の、ゆ、
さ、ゆ、さ、ゆ、と、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
ま、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
う、さ、ゆ、我、と、さ、ゆ、の、さ、ゆ、さ、ゆ、
ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
校、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、
さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、さ、ゆ、

明治三十六年梨山縣生產一覽表

[illegible]

一表を掲ぐに成るなり、之を教諭するが
 べきに齊く来るべきにあらざる

明と谷干城とやうに飛城し以て人を伏せたり物と云
 一明と強き物方めしめあを晴るゝ木を伐
 此めあは汝あり知るといふよしと云ふ浮城
 を受け人おひあると云ふ事、青山梨の如
 事と云ふこととある其の御成り人々も
 此の地を悔老し一日その心あるさうなる
 と一人あへて互くべき変物にある、それと市川
 と云ふものの流石な信と云ふものひよつ
 んとちまたある物なるか、あやふし、芝草集を
 つとめ、^{花集}二篇書もあると云ふ、^{花集}青柳又
 庫と名づけて、因吉館と云ふ間、これと云ふ

そうだ、拙い酒よりとよみ酒を起つて旅館で
 物へんたう金草と校友の拙いんておんな
 まれいふあをふたれた、北のふたでも古人文へおん
 あういふ、いつをくつろいひ、
 懐懐と覚えんた、こゝの學問の
 湧き出た、とんとて、
 みんとするの、
 此境の事を説く、
 まるくとも中り物くまに中り、
 とおん、
 校友、
 胡行き、



羅漢寺

むんろいぬうある日遊戯と終る朝餉を
 あつめりていふ内朝記ひききる侍に
 ハ早や仕ふと出来ぬと催促に來れ
 ぬ計とせんは早や朝の禱金のめりる也
 いふ侍もさういふ侍も出で海の家
 不とけりて思ふは校及び侍とありぬ
 う侍の雨とぬそ二十人かゝる侍も
 草鞋むきと早や侍の侍も荒尾
 の庭先と集まりてふ侍も侍もさう
 出ぬ侍もさういふ侍もさういふ侍も
 とさういふ侍もさういふ侍もさういふ侍も

三列記しとある溪園の名を左の如くある

天神森

長潭

望鷹石

鷹栗山

龍泉

仙涌岩

三石

不動岩

龍輦瀑

猿岩

不士石

万石

蛤石

龍潭

寒山拾得岩

五月雨岩

龍泉

龍潭

天鼓林

羅漢寺

天台山羅漢寺

五石羅漢

龍泉

龍潭

元日峰

天狗岩

四石寺像

石門

浮石

雪虹瀑

東林園



巨巖大石刻蒼穹
千載永傳開削積
思狀龍形興不窮
于今游壑說圖翁

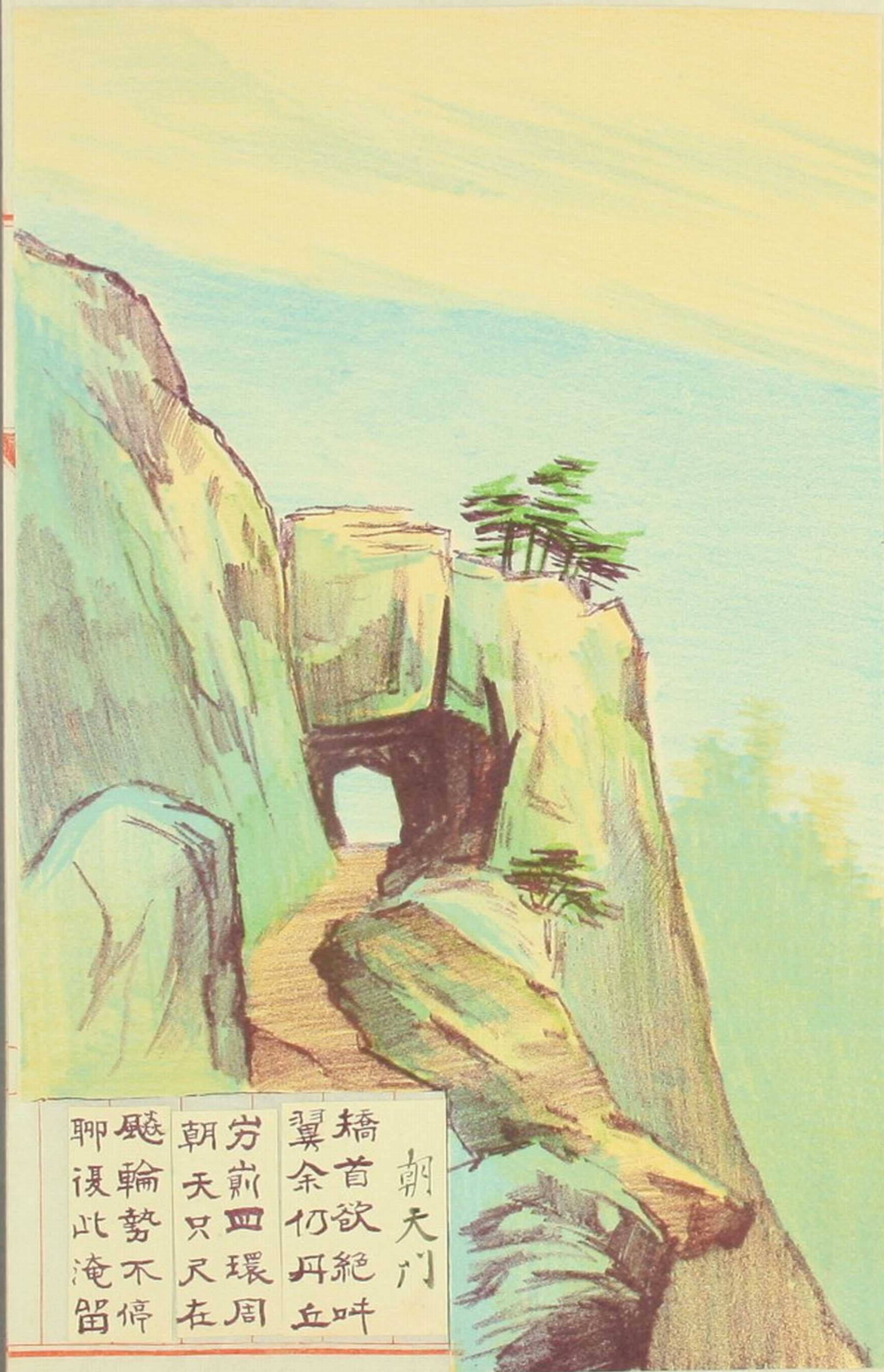
高麗のまは院（出）
 ありあけの院、深潭、とて潭
 と名づけんとす、北麓此潭、より
 なるありあけ、係し、時ふか、餘り陰折
 窮屈ひ、何とて人として陰折の思ひあ
 しえ、上乘の境とて、いひあめ、我は
 可成した、さき、ん、二十、町、山終
 を往くと、元上げ、う、い、あ、新、石
 西、晴、の、築、ん、ん、院、延、り、
 く、何とて、う、ん、と、道、終、が、通、い、て、
 二、似、て、寺、の、あ、り、あ、り、
 二、似、て、寺、の、あ、り、あ、り、

東棗原製

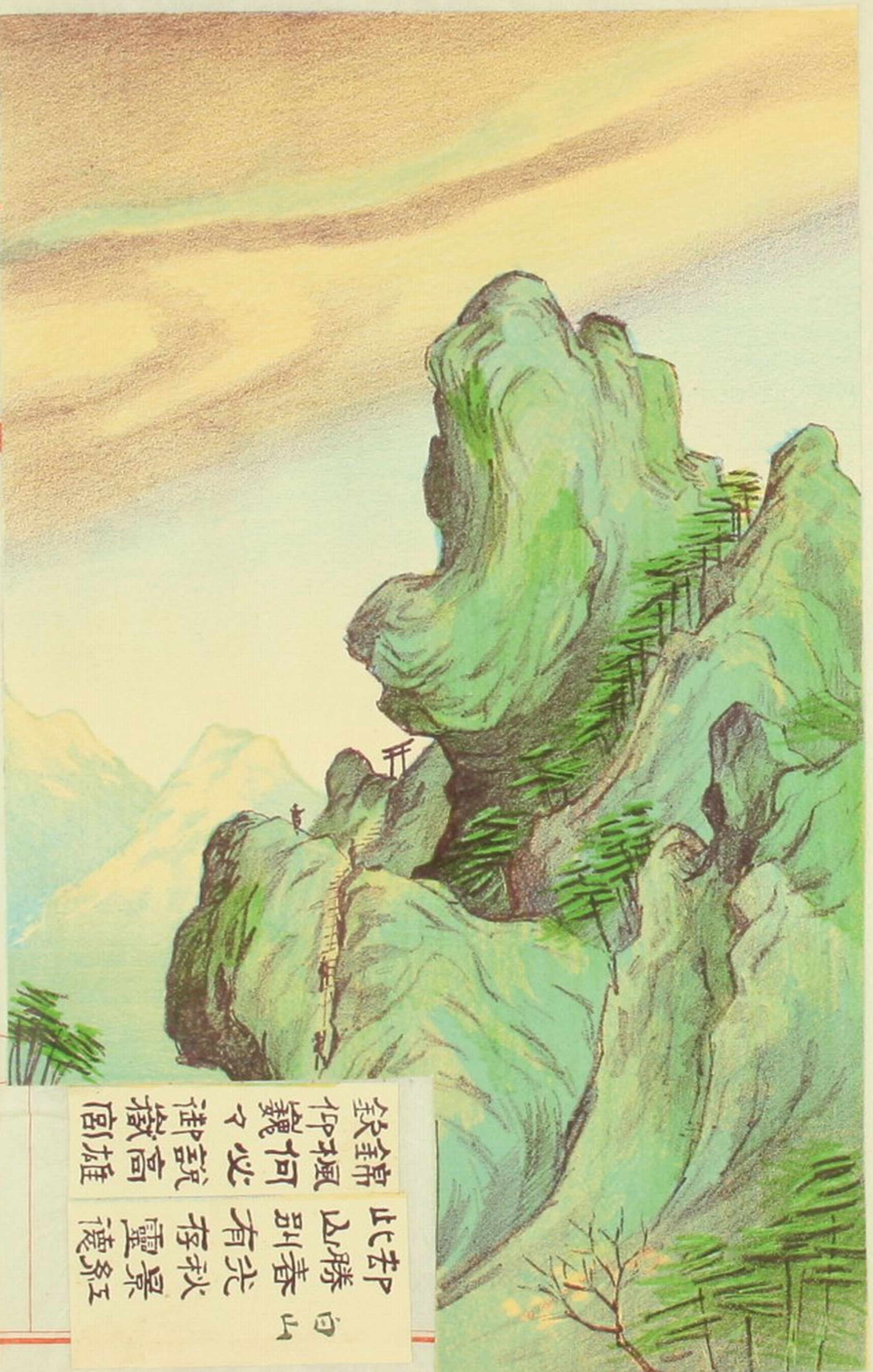


屏仙橋
後山勢將斷
飛橋架巖隈
前山復欲來
風光收不盡
一水界中路
橋上久徘徊

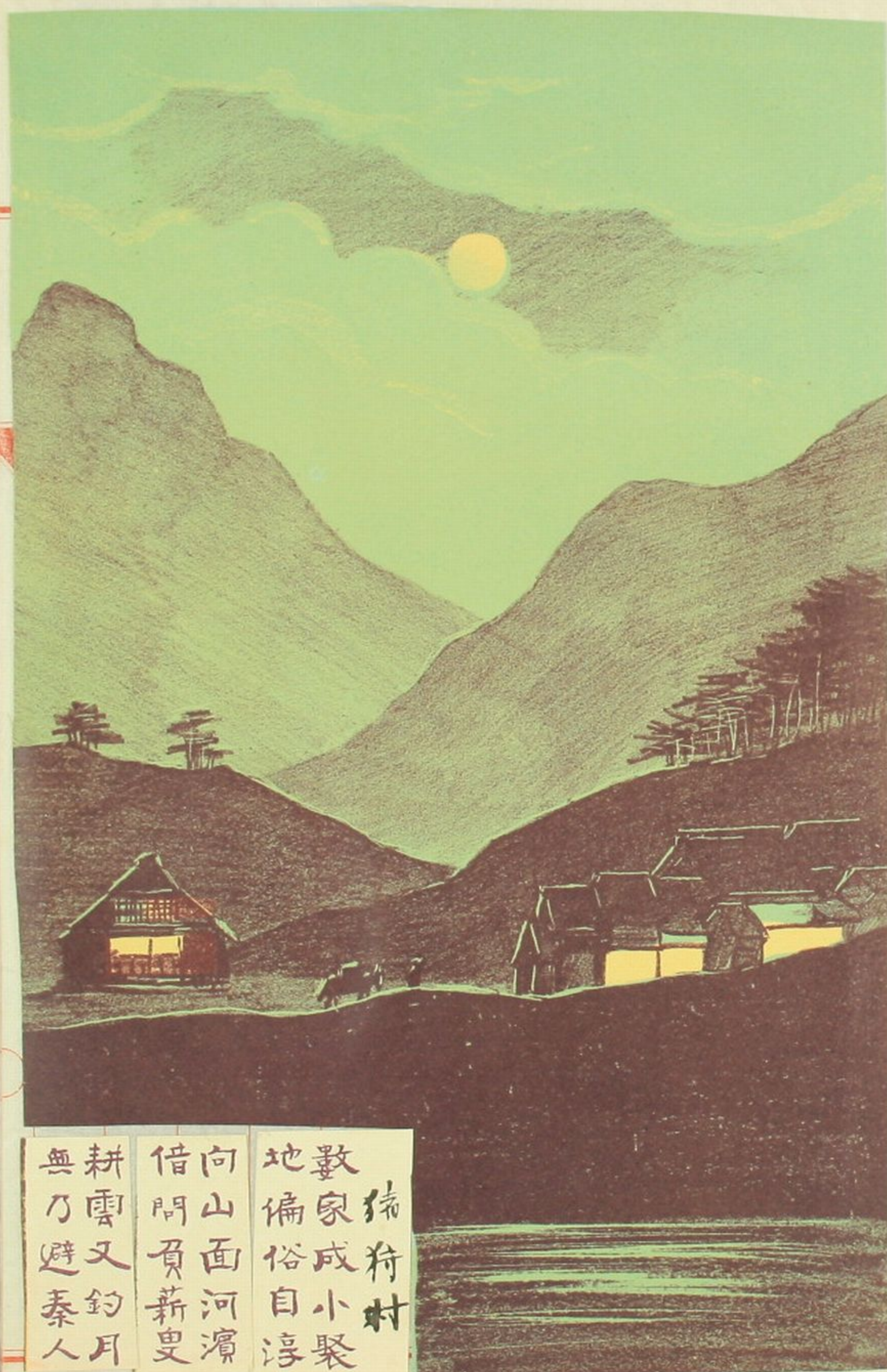
K. V. A. Tori



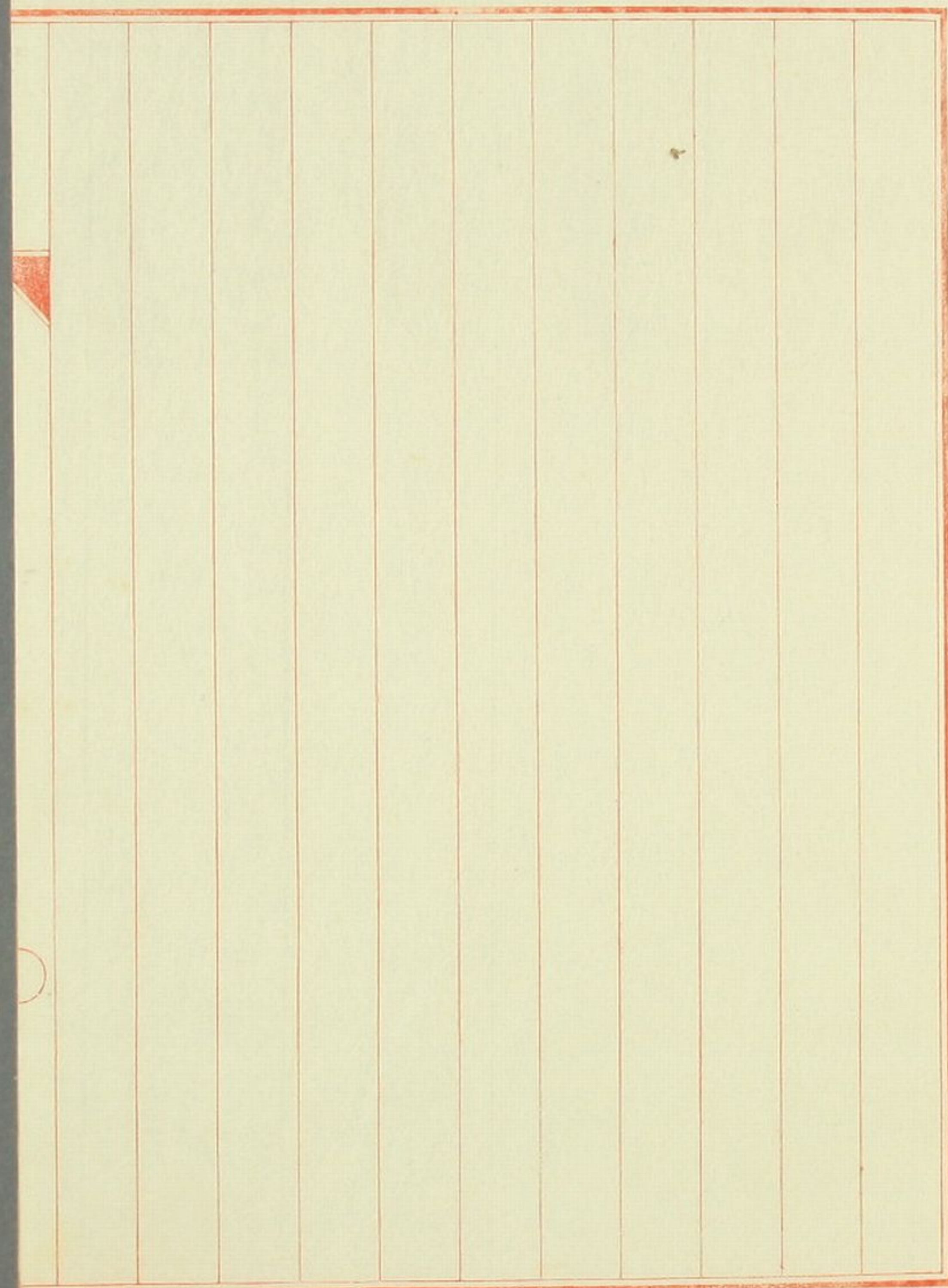
朝天門
 橋首欲絕呼
 翼余仍丹丘
 芳前四環周
 朝天只尺在
 聽輪勢不停
 聊復此淹留



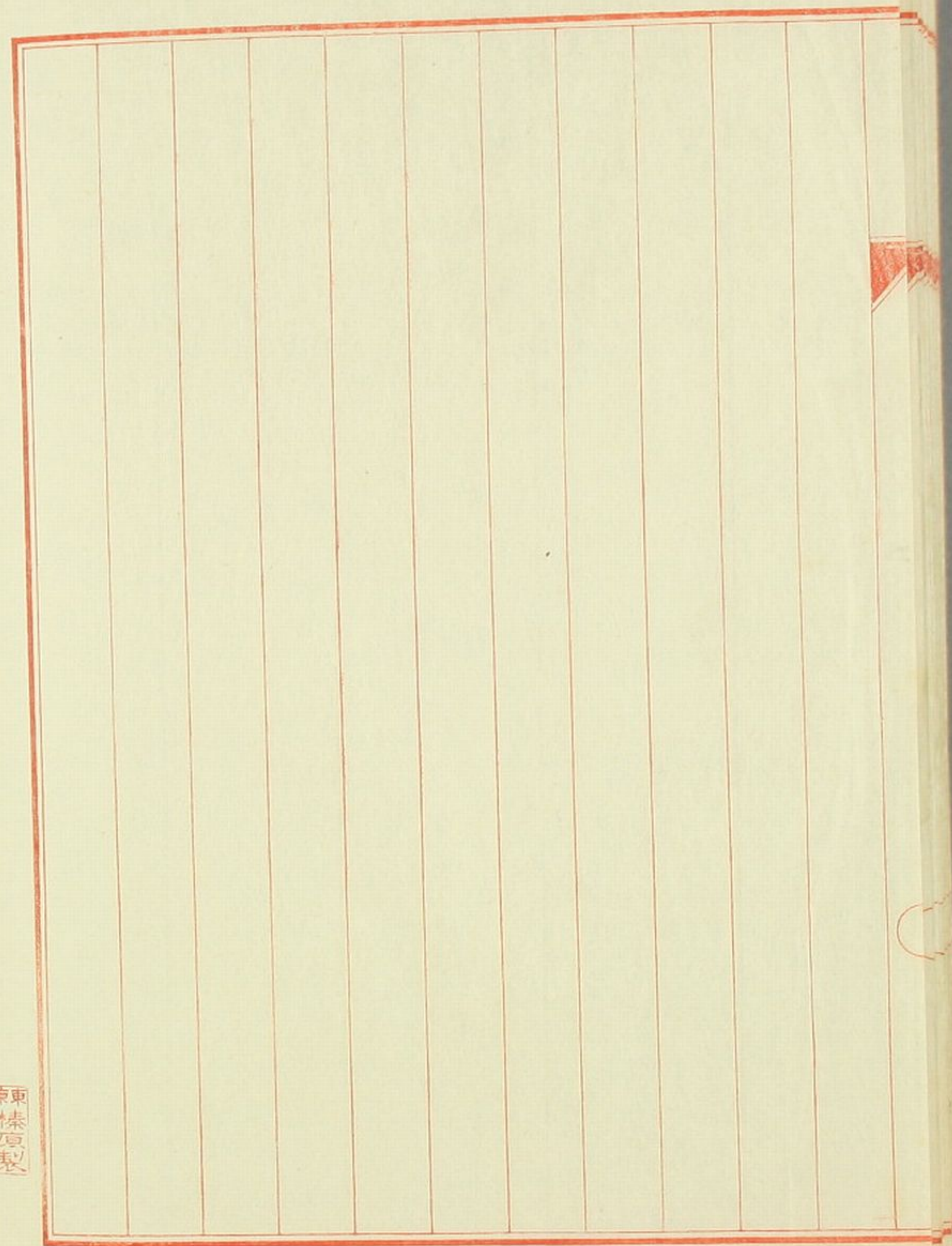
此去勝別有存靈景
錦仰窺何必說高雄



無耕借向數
 乃雲問山家
 避又負面成
 秦釣薪河小
 人月叟濱聚



東
棧
原
製



以下全て
白紙

明治三十七年十一月
上浣起筆

喜悅閑人